

『稚児今参り物語』における『木幡の時雨』受容補考

片岡麻実

一、『木幡の時雨』の和歌

『稚児今参り物語絵巻』と奈良絵本『ちごいま』の本歌取りに関しては、拙稿『稚児今参り物語』成立私考―和歌受容の側面から―（『研究と資料 七〇輯』所収）において、『とりかへばや物語』の他、『木幡の時雨』、『平家物語』、散逸物語『水無瀬川』『すまひ（相撲）』の影響がありうることを検証した。

拙稿での検証時には、先行する物語から本歌取りをしたと考えられる「孫引き的な歌」が複数見受けられた。そのため措辞レベルに限れば、「これらの物語のからの影響・受容はありうる」と小論の筆者は判断した。

しかし『稚児今参り物語』の作者がこれらの物語の写本を手元に置き、物語を執筆した事を記した明確な記録があるわけではない。現時点で明確になっているのは、西洞院時慶が『時慶卿記』慶長十年条に「三月四日児今参ノ双紙初而一見候」と記載した事のみである（1）。

本稿ではその事を踏まえた上で、前掲論文においても検討した『木幡の時雨』との影響関係を補察する。その際、『稚児今参り物語』は『木幡の時雨』からの影響を受けていない」という作業仮説をた

てて、この仮説は成り立つのかどうかを検証したい。

前掲論文では紹介できなかったが（2）、奈良絵本『ちごいま』が『木幡の時雨』から影響を受けた可能性がありうる例を以下に示す。

『稚児今参り物語絵巻』 稚児

①そのままに ころろは空に あくかれて みしおもかけそ
身をも離れぬ（3）

『木幡の時雨』 木幡の東宮

②知らせばや 別れし空も そのままに またかきくらす 雲
井なりとも（4）

①の和歌は『稚児今参り物語絵巻』のみに収録され、奈良絵本では削除された。「そのままに」の和歌は、木幡の東宮が詠んだ②の和歌とやや類似が見られる。木幡の東宮の②の和歌は、奈良絵本『ちごいま』（中）の冒頭・東宮妃となる予定の姫君を間近で見た稚児の描写部分、

その夜よりさふらひて、ひるなども、さしむかひて見たてまつるに、くもぬのよそに、見およびたてまつるに、これも又ゆめかと、うとましくたとられて、はては、なけきのもりをも、しらぬそ、はかなきや（5）

に、引かれた痕跡が見られる。

奈良絵本『ちごいま』 稚児

③思ひきや うきにめぐりし みつくるま うれしきよにも

あはん物かは(6)

『木幡の時雨』 木幡の中納言

④思ひきや 時雨の宿の ひとふしの 長き思ひに 沈むべし

とは(7)

『木幡の時雨』 木幡の中納言

⑤思ひきや 時雨に濡れし かりそめの 露けきなかと なら

んものとは(8)

③の和歌「思ひきや うきにめぐりし みつくるま」は、物語の最後に稚児と姫君の仲が内大臣に認められ、稚児が感慨に耽って詠んだものである。一方、木幡の中納言の④⑤の和歌は、引き裂かれてしまった恋を嘆く歌である。

『ちごいま』の③の和歌と『木幡の時雨』の④⑤の和歌は、終わりの部分が「かは」と「とは」で韻を踏んでいる。木幡の中納言の④の和歌では「ながきおもひにしづむべしとは」とされているのに対し、稚児が詠んだ③の和歌は「うきにめぐりし」と詠む。「浮き」と「憂き」を掛け、「沈む」の対義語にしている。

「水車」(「水ぐるま」「みつくるま」を含む)という語が使われている和歌を、『新編国歌大観』を元に調べた。

めぐる…七首(めぐり…一首、めぐらぬ…一首、めぐりて…一首を含む)

うき…四首

よ…六首

よにめぐる…三首

うき十めぐる…三首(めぐり十うき…一首を含む)

うき十よめぐる…二首

『ちごいま』の③の和歌は、「うき」と「よ」が同じ和歌に使用されている。しかし「思ひきや」かつ「水車(平仮名交じりも含む)」の組み合わせを持つ和歌は、『ちごいま』の稚児の和歌以外になかった。

「水車(「水ぐるま」「みつくるま」を含む)」かつ「宇治川(「うぢの川」「うぢがは」「うぢ川」を含む)」という組み合わせを持つ和歌は、「水車」を含む十九首中七首であった。「宇治川」を含む和歌が、「水車」の語を含む和歌の三六・八%を占めるということは、奈良絵本『ちごいま』の③の和歌に、宇治川のイメージが投影されている可能性が浮上する。

二、かのひやうふきやうのみや、なかのきみへの、御むかへ

加えて注意すべき点を示す。

かのひやうふきやうのみや、なかのきみへの、御むかへもかきりあれば、かくこそ、おもひあはせられて、のこりとまり侍るも、なぐさむ心ちして侍りけり

ちこ、おとこすかたにてそ、いて給ひけり、みつくるまを見て、思ひきや、うきにめぐりし、みつくるま、うれしきよにも、あはん物かは(9)

稚児が想起している「かのひやうふきやうのみや、なかのきみへの、御むかへも」は、「兵部卿宮による中の君へのお迎え」ととらえるべきか、それとも「兵部卿宮(のときの)中の君へのお迎え」ととらえるのがよいのか。「かの」を「あの」「例の」と解釈するか、それとも「故人」と解釈するのがよいのか。

前者で解釈するならば、『源氏物語』の匂兵部卿宮と中の君を示唆している可能性が考えられる。後者で解するならば、『木幡の時雨』の主人公の父・故奈良兵部卿右衛門督を示唆している可能性もありうる。稚児が「かくこそ、おもひあはせられて、のこりとゝまり侍るも、なぐさむ心ちして侍りけり」と述べていることから、「かのひやうふきやうのみや、なかのきみへの、御むかへもかきりあれば」は、仮に「中の君を迎え入れる機会があったからこそ」ととらえて検討する。

『源氏物語』の匂兵部卿宮は母・明石の中宮の反対にあつた後、母の了解を得て、宇治にいた中の君を屋敷に迎え入れた。中の君が『木幡の時雨』の中の君と仮定した場合は、「故人の奈良兵部卿右衛門督の娘、中の君を中納言が妻に迎え入れようとした」と解釈することもできる。

『稚児今参り物語』は東宮への入内を控えた姫君が、稚児との結婚を認められた結果、

うち、とうくうにも、ひめきみは、なき人と、しられにし事なればとて、このきみをは、ほかからの、御ことそ申ける(10)とされた。

『木幡の時雨』の中の君が妹の三の君を身代わりに立てて東宮(式部卿宮)に入内させた点と、『稚児今参り物語』の姫君が外腹の姫君に成り代わり、東宮には死んだことにした「入れ替わり」の趣向に、双方の影響関係があるのかもしれない。この点は『とりかへばや物語』の「入れ替わり」の趣向が両物語に取り込まれた結果として、類似した可能性も考えられる。

奈良絵本『ちごいま』の大団円では、

かたちうつくしくして、二人いて入給へは、うちよりはしめたて

まつりて、世の人も、おもふやうなる事とて、めてたくきこえけり

そのうちも、わかきみ、ひめきみ、ひかるやうに、いてきそひたまへれば、にようこに、まいらせ給ふ(11)

とされ、主人公の子どもたちの代で娘が女御になる趣向も、『木幡の時雨』『稚児今参り物語』で類似していることがわかる。

和歌の本歌取りの他、主人公たちが苦難を乗り越え、物語後半で幸せな結末を迎える点、子どもたちが入内した点は『木幡の時雨』と『稚児今参り物語』に趣向の類似が見える。したがって、『稚児今参り物語』は『木幡の時雨』から影響を受けていないとは言えない」という結論に至った。

ただし『ちごいま』で引かれている「かのひやうふきやうのみや、なかのきみ」は、「水車(みつくるま)」が「宇治川」と関連が見られる語である事を踏まえると、私見では『源氏物語』の匂兵部卿宮と中の君を喩えに出した可能性が高いように思う。『稚児今参り物語』と『源氏物語』の関連については別稿でさらに論じたい。

【注】

(1) 市古貞次『中世小説とその周辺』(東京大学出版会、一九八一年)二六一頁。「慶長十年(中略)三月四日兎今参ノ双紙初而一見候(時慶卿記)」を参考にした。

(2) 片岡麻実『稚児今参り物語』成立私考―和歌受容の側面から―(「研究と資料 七〇輯」所収、二〇一三年二月)にて、「底の水屑」「底の藻屑」の検証の際、『木幡の時雨』と『稚児今参り物語』の類似点を紹介した。

(3) 松本隆信・編『室町物語大成 補遺二』(角川書店、一九八八年)二〇七頁。

(4) 大槻修・田淵福子・森下純昭・校訂訳注『中世王朝物語六 木幡の時雨 風につれなき』(笠間書院、一九九七年)六六頁。

(5) 松本隆信・横山重・編『室町時代物語大成 第九』(角川書店、一九八一年)二五四頁。

(6) 松本前掲書(注4参看)二六八頁。

(7) 大槻前掲書(注3参看)一八頁。

(8) 大槻前掲書(注3参看)五〇頁。

(9) 松本前掲書(注4参看)二六七〜二六八頁。稚児が詠んだ「みつくるま」の和歌については、『金葉和歌集』(三奏本)所収の

水車をみてよめる 僧正行尊

はやぎせに たたぬばかりそ 水ぐるま われもうきよに め

ぐるとをしれ(『新編国歌大観』第一卷五五一番詠)

との類似が見られる。別稿にてさらに論じたい。

(10) 松本前掲書(注4参看)二六八頁。

(11) 松本前掲書(注4参看)二六八頁。